

その詩心を訪ねて

山や自然を愛した詩人、尾崎喜八（1892〜1974年）が亡くなって、今年2月で50年になった。喜八は1946年9月から7年間、富士見に滞在した。その縁で茅野市豊平小、岡谷南高校（岡谷市）、富士見町富士見小学校など諏訪地域をはじめ、県内の小中学校、高校を中心に生涯で40を超える校歌を作詞し、今でも多くの児童・生徒たちが歌われている。激動の20世紀を生きた詩人の心の変遷を、「自註 富士見高原詩集」などを手掛かりにたどってみた。（飛矢崎貴規）

自然や人間を

賛美する詩人

東京市京橋に生まれた喜八は、京華商業学校を経て中井銀行に就職。武者小路実篤や志賀直哉などが創刊した雑誌「白樺」の影響を受け、理想主義的な作風の下、自然や人間を賛美する詩人として出発した。

30歳で最初の詩集「空と樹木」を刊行すると、「道程」などで知られる詩人で彫刻家の高村光太郎、フランスのノーベル文学賞作家ロマン・ロランとも手紙を通じて交流した。

喜八は夏の暮らしを描いた「高層雲の下」から「クリスマス」、「大根」に至るまで、日々の生活の景色と心情を自由な形で歌った。

第5詩集「行人の歌」に納めた「私の詩」では、素朴な魂のひとびと、日々の悪戦を戦う人びとに自分の詩を贈りたいとし、「私は自分の詩

尾崎喜八 没後50年

によつて 彼らの楽しい伴侶でありたい」と願った。

自然観察の成果を集めた随筆集「山の絵本」、独学でドイツ語を習得してヘルマン・ヘッセの翻訳も刊行し、旺盛な文学活動を展開。大正期の自由主義的雰囲気があり、昭和初年の世界恐慌、ファシズムと戦争のにおいが濃くなる中、配給の辛が題材にした「此の糧」、銃後の民衆を歌った「同胞と共にあり」を書名に選んだ詩

集も出版した。

敗戦で心に傷

生き直す決心

しかし日本は1945年8月に敗戦を迎え、精神的に傷を負う。「慟悔と後悔」から世の中や過去から離れ、「全く無名の人間として生き直すこと」を願い、46年9月に元伯爵渡辺昭が富士見高原に所有していた別荘

富士見

「分水荘」へと移り住む。

〈人の世の転変が私をこへ導いた。 古い岩石の地の起伏と めぐる昼夜の大きいなる国、く（土地）へとやつて来た。

富士見の地で「春の牧場」

「夏の小鳥が……」或る晴

れた秋の朝の歌」など高原の四季を折り込んだ詩を創作。厳しく美しい自然と、

その中であつて貧しくも心



「分水荘」の書齋で執筆中の尾崎喜八
—富士見町高原のミュージアム提供

話題
キャッチ